

【史料翻訳】

カーレル・ファン・マンデル『絵画の書』（一六〇四）（六）¹

尾崎 彰 宏

（fol. 289r22）ケルン出身のすぐれた画家、ハンス・ファン・アーケン（フオン・アーヘン）の生涯²

若い画家たちの精神が鼓舞されるのは、いたるところで称讃され、令名をはせるほど、芸術において衆に抜きんでて傑出した画家になった者について耳にしたり、そうした存在を発見するときだ。全知の 名声 は、トランペットでその画家の名前をあまねく響きわたらせる。たとえ水深きところであろうと、急峻な頂であろうと、届かぬところはない。数多の目のついた翼をもつ 名声 は、あらゆるものの上空を飛翔するからだ。それゆえ、目映い輝きを発し、はるか遠くからでも目撃されるような芸術家は最高に偉大で、権勢ならびなき君主や世俗の権力者たちに熟練した腕前によって芸術性豊かで高貴な精神を披露し、じぶんの存在をアピールするために、しばしば旅にでようという気になる。美しい絵画芸術

（Pictura）のような、目を楽ませる（oogen cost）贈り物で貴顕の士を大いに慰めるような場合、芸術家は、尊敬に値するような地位に就いたり、君候からたいへんな敬意と評価を受けるようになる。そのような運命のめぐりあわせに遭遇したすぐれた画家のなかに、ハンス・ファン・アーケンがいる。一五五六年、ファン・アーケンは敬虔で志操堅固な両親のもと、ライン川に面した有名な街ケルンに生まれた。信心深く生真面目な性格の父の出身地がアーヘンであったことから、その街にちなんで息子の名前をつけた。慈悲深い母なる自然は、少年がまだ年端もいかぬ時分から目をかけ、彼の記憶と精神に高貴さと絵画芸術の偉大なる魅力を深く刻みつけたといえ、ファン・アーケンが一〇歳か一二歳くらいまで、学校で読み書きに専念できるように温かく見守っていた。だが、それにはつぎのような条件がついていた。学業の合間に、自然に鼓舞され、ペンなどの道具を使って

できる限りデッサンに励まなければならない、というものである。彼は、さまざまな人びと、動物をはじめとして多様な対象を描いた。かくして、完全なものに到達し、名誉と成功を得るために、自然が示唆した途にそって彼は歩みはじめた。その方向にむかって彼は自発的にかつ勤勉に励んだのである。ファン・アーケンはどこにいうともあるいはどこに行こうとも、世界という偉大な仕事場ないし学校の中で、彼を教育したり彼に強い刻印を与えたあらゆる事物に、直接注意を向け、神経を集中させたのである。彼の師匠である自然は繊細で美しく魅力的で、醜いものとは一線を画した秩序だった姿をして彼の前に立ちあらわれる。誇り高く頭を凜と上げながら、優雅に駆け、惚れ惚れするような姿形をした馬や、衆から水際だって上品な女性の容貌を目にしたりすると、そのような対象を最善を尽くしてできうる限り完璧に彼はデッサンした。その結果、そうした対象固有の特徴 (eenighen aard) すなわちデッサンを見れば対象の特徴が見る者に一目瞭然となる。ある公爵夫人がケルンを訪れたことがあった。ファン・アーケンは、だれの目にもその夫人だとわかるように彼女の貌 (tronie) を (窓辺に腰掛けている間に) 描いた。その中に、いくらか対象を見上げるような角度から猫を写生した、ペンデッサンがある。そのデッサンを少年の父のところで目にしたある画家が、少年はすでに肖像画 (Conterfeyten) の訓練を積んでいることを見てとり、その方面でさらに腕を

上げるだろうと考えた。ところが画家はその逆のことを耳にして、ますます驚き、絵画芸術を学ばせてもらうべきだと少年にアドバイスした。というのは (と画家は言う)、「少年には「画家になるのに」必要なものはそなわっており、偉大な画家になるのはうけあいであるからだ。かくしてハンスは、凡庸な画家の門をくぐり、一年あまりそこに留まった。学ぶことが何もないことに気づき、ジョルジュ (Giorge) ないしはイェルク (Jerigh) と呼ばれたケルン在住の画家の門を叩いた。その画家はアントウエルペンで訓練を積んだワロン人である。貧しさをバネにして、実物写生にもとづく立派な肖像画家になり、肖像画の分野で卓抜であった。その画家のもとでハンスは長足の進歩を遂げた。その結果、入門して六年後、師匠が亡くなったとき、彼は驚くほど優れた肖像画家に成長しており、多くの卓越した貌 (tronie) を手がけた。このあと、彼は身を入れてデッサンの修練に励み、当時の彼の手になるデッサンから明らかなようにスブランゲルの生彩ある様式を手本にしていた。さてハンスが二二歳になったとき、イタリア旅行に出た。ヴェネツィアに到着したとき、ガスパル・レムス (Rems) というネーデルラント出身の画家の招待を受けた。レムスには、ハンスが美術にたいする能力があるか否かを試すつもりはなく、ハンスの出身地しか訊ねなかった。レムスはハンスがケルン出身だと聞いて、こう言った。「ならば、あんたは *Mof* (ドイツ人に対する蔑称) か。奴らはまあ、美術

になんぞ向いてないよ。レムスはハンスといっしょに、モレットという平凡なイタリア人画家を同席させた。モレットは、旅職人(reysende ghesellen)に仕事を周旋したり、絵画を商っていた。彼はハンスにヴェネツィアの教会にあるすばらしい作品を何点か模写させた。なかでも、先にふれたガスバルのために、ハンスは鏡を持つ笑う自画像を制作した。この笑い顔は驚くほど精巧な出来映えであり、すばらしく巧みに仕上げられていた。これを目にして、ガスバルは吃驚し、Moffen(ドイツ人をそう呼んだように)などは無能だと暴言を吐いたのは愚かな偏見に囚われていたからで、じぶんがひどい誤りを犯したことに気づいた。ガスバルは生涯にわたってこの肖像を自慢し、称讃しながら、だれかれとなく見せていた。この一件のあと、ガスバルはファン・アーケンのためにカンヴァスを用意し、それらの下塗りを喜んで引き受けた。このことから、じぶんたちが面識のない人を軽蔑したり、生地や見かけによって人を判断することが、いかに軽率で礼を失した振る舞いであるか察しがつくというものだ。ファン・アーケンは、各地を遍歴しローマに到着した。ローマで彼は多くの美しい作品を完成した。その中で水際立っているのが、錫もしくは鉛の板に油彩で描かれた祭壇画である。この絵は「降誕」をあらわしており、イエズス会の長老たちの御意にかなうように、天使などが独特の様式で描かれている。というのは、その絵は、カピトリウムの丘の下教会に掛けられてお

り、並はずれて美しい絵であつたからだ。彼が手がけたたくさん作品についてはさておき、皿か葡萄酒を手にとって彼女の後ろに立っている彼の傍らでリユートを奏でる「愛らしい婦人 Madonna Venusta」と呼ばれた女性といっしょに、笑うじぶん自身も描きこんでいる。この絵は巧みに処理され仕上げられているので、美術愛好家(Conserverstandighe)は、彼の手になる作品はもとより、ほかの画家の作品でもこれ以上すばらしい絵を目にしたことはないと言っている。ファン・アーケンはフィレンツェにも足を運んだ。その地で彼は、フィレンツェ公爵として有名なメディチ家のフランチェスコ一世(一五四一—一五八七)ばかりでなく、貴顕の紳士淑女のお歴々を前にして数々の肖像画を描いた。その地で彼はマドンナ・ラウラという名前の才能豊かな女流詩人の肖像も描き、その貌の「コピー」を所持していた。その「コピー」は、今でもアムステルダムにいる彼の弟子ピーテル・イザークスゾーンの手元にあり、卓越した出来映えをしめしている。ヴェネツィアに戻ったとき、ファン・アーケンはマーストリヒト出身のネーデルラント商人の依頼で重要な作品を何点か手がけた。最初に着手したのが、等身大の《嘲弄されるキリスト》(「現存しない」)である。ほとんど全裸のキリストの身体は、倒れかからんばかりに一方に傾斜し、上方に目をやる美しい身振りで描かれている。つぎに制作されたのが、等身大ですばらしく美しく巧みに処理された《ダナエ》(「知られていない」)である。聖力テ

(fol. 290r)

リーナと天使たちに囲まれた聖母マリアも銅板に描かれ、ラファエル・サデレルの手でエングレーヴィングに起こされた。その版画は絶妙な一品である。それから、半身像よりも大きい等身大のクピドと、座っているウエヌスの描かれた絵（知られていない）が制作された。ホメロスが神々への頌歌で謳っているように、その絵では、キプロス島近辺の海からあらわれたウエヌスが、時から聖なる衣裳と宝石を授けられている。これはとくに壮麗な作品でもある。ケルンに帰還したとき、ボーツという名前の商人のために『パリスの審判』（ドゥエ、シャルトルーズ美術館）というたいへん美しい絵を制作した。その絵は、ラファエル・サデレルの手で版画に起こされ出版された。このあと、彼がヴェネツィアにいたとき、偶然のことでファン・アーケンは、ミュンヘンの栄えあるバイエルン大公の執事を務めたシュヴァルツェンブルク伯爵オットー・ハインリヒから、その葬礼教会に墓碑銘を制作するために招聘された。この絵には、聖ヘレナの聖十字架の発見 という物語が描かれており、半身像よりも大きな群像からなるパネル画で、卓抜な作品だ。先の公爵の尽力とこの作品の出来映えによって、大公の知遇を得た。大公、公妃、末息子と末娘の二人が一枚の絵におさまるような家族肖像画を彼は手がけた。その絵にはだれもがたいへん満足した。ファン・アーケンがあれこれ種々のすばらしい作品を描いたとき、大公は過分なまでの報酬にくわえ、彼に美しい黄金の鎖を下賜した。さらに大公

(fol. 290v)

は、二〇〇フロリンに値する黄金の鎖でもって画家を顕揚した。ファン・アーケンはバイエルンからブラハのルドルフ二世のもとに赴いた。四年前から声をかけていたのである。というのは、皇帝は、彼の手になるシャンボローニャ、ネーデルラント出身の傑出した彫刻家の肖像を目にしたことがあったからだ。その肖像はファン・アーケンのフィレンツェ滞在時に描かれたものである。かくして、皇帝陛下から再三にわたって招聘されたので、特使の慫慂に応じるかたちでファン・アーケンは、皇帝のところへ足を向けた。彼が皇帝のもとにあり、皇帝のために『ウエヌスとアドニス』（所在不明）を描いたとき、皇帝は、尋常ならざる新しい彩色のためにファン・アーケンの描法（handeling）をいたく気に入った。しかし何らかの理由で、ファン・アーケンは、ふたたびミュンヘンとアウグスブルクに戻り、なかでもミュンヘンのイエズス会教会のためにたいへんすぐれた出来映えの『聖セバステリアヌス』（現在なおミュンヘンのミカエル教会にある）を制作し、版画として出版できるように下絵も描いた。それをアムステルダムで卓越した銅版画師ヨアン・ミユラーが版画に起こした。このとき彼はアウグスブルクのフツガー家のお歴々の肖像画を描いた。その間、著名な音楽家にして当代のオルフェウスといわれたデ・ラツソの娘と華燭の典をあげたのである。このあと彼は皇帝に召還され、ブラハに家族ともども帰還した。芸術上、彼はしかるべき評価に値したので、その当時世界でもつ

とも偉大で重要な美術愛好家に遭遇したのである。その稀代の美術愛好家の委嘱を受けて、爾来、彼はその画廊を飾る画家(schilder zijner Camer)としてとどまつた。そして彼は、この偉大なるアレクサンドロス大王とアペレスが切り結んだのと同様の友誼溢れる関係を日々たち、皇帝から尊敬され評価されたのである。彼は皇帝のためにたいへん美しい重要な作品を多数描いた。そうした作品は宮殿、厩舎の上にある大ホール、美術陳列室の上の画廊、陛下のいくつかの部屋、で数多見ることができる。アムステルダム美術愛好家ヘインドリック・ファン・オス殿(一五五五/五六年、アントウエルベン生まれ。一五九一年にアムステルダムの記録に登場する。一六〇二年、兄弟デルクといっしょに二〇〇フルデンを東インド会社に投資する。彼は相当数の絵画を所蔵する美術愛好家であった)のもとにもファン・アーケンの手になる美しい大作がある。非常に巧みに処理され、上手に描かれた等身大の人物像からなっている。戦争、ないしは、戦争の道具を踏みつけた顔立ちの整った美しいヌードの女性像、月桂樹を持つ平和、が描かれている。彼女とならんで、豊富、技法、絵画、などの姿が見られることから、平和が繁栄と諸芸術の隆盛をもたらすありさまが描かれている。今やようやくにしてファン・アーケンは、その芸術が非常に愛され、評価されるような地位に登りつめ、彼の作品がその存在を証拠だてる画家になっており、彼の

デルク・ファン・オス

高貴な仲間やその献身的な生活の仕方がしめすような高貴な気質をもっている。あらゆる芸術家にたいして好意的であり、誰にも悪感情をいだいておらず、みんなにたいして親切であつたからだ。自惚れが強くて貴顕の土に取り入ろうとしたり、毒舌でもって他人の禍や悲嘆の種をまくような輩とは一線を画していた。それゆえに、彼の生命の糸が未長く健やかに紡がれていき、かくして、彼によつて絵画芸術がますます豊かさを増し、敬意を表されるものにならんことを、また絵画芸術によつて彼がそうした荣誉に浴すことをわたしは願つてやまない。ファン・アーケンといっしょにイタリア、ドイツを旅行した彼の最初の弟子が、ピーテル・イザークスゾーンである。彼は、一五六九年、ヘルセンゲア(デンマーク東部、シュラン島北東端の街)かエーレソン近辺の生まれである。その父はハールレム出身であつた。彼はまずアムステルダムでケテルの門を叩き、芸術の手ほどきを受けた。そこに一年半とどまつた。彼は今でもやはりアムステルダムで活動しており、すぐれた肖像画家となつてゐる。彼は歴史画、構図、デッサンにあつても充分な経験を積んでおり、絶妙な様式で描いている。レイデンのブレーストラート(広小路)には彼の手になる、ひととき美しく卓越した肖像が一点ある。その肖像はサラ・スハイルマンスという名前の少女である。ここには彼女の膝下まで(四分の三半身)描かれている。繻子の衣裳、ツイターを弾く手が巧みに描かれているのにくわえ、とりわけ貌は

(fol. 291r)

称讃に値する出来映えをしめしている。肖像は生き写しで、たいへん注意深く描かれている。みごとに仕上げがなされており、愛らしく魅力的だ。この作品は、彼がわれわれの芸術にあつていかなるたぐいの画家であるかをあますことなくしめしている。レイデンのデ・クロックにやはり彼の手になる、たいへんみごとに仕上げられた二枚の肖像（知られていない） ピーテル・ハイヘスゾーンとその最初の妻 がある。アムステルダムホル・アファブルフヴァル通りに住む美術愛好家ヘンドリック・フランキン殿（一五五九 一六一七、一六〇二年、東インド会社に三三〇〇フルデン投資している）のもとに、彼の手になる大作 《アダムとエヴァ》 と、銅板に描かれた《説教するヨハネ》がある。後者は構図もよくできているし、生彩ある絶妙な小品である。前記のフランキンとその妻の肖像もやはり彼の手でみごとにまた克明に描かれている。彼がこれまでに手がけた最良の肖像は、英国のロンドンにある。ネーデルラント人の末裔で英国在住のピーテル・セメイネスとかいう人の肖像だ。美しい艶のある巻き毛の綺麗な顔の持主である。さらにアムステルダムのヤーコプ・ポツベ殿（ポッペン、一五七六 一六二〇）の肖像は、アムステルダムの富豪のもとには、彼の手になる卵形をした美しい大作が三点ある。ことにヤーコプの肖像は、細心の注意をはらって顔や髪の毛がたいへん巧みに描かれ、本人に生き写しである。同じ家には、若年のパピュリウスが、男は妻を二人持つべきだと元老院で決議され

たかのごとく母親を偽ったために、古代ローマの女性たちがかピトリウム（古代ローマのユピテルの神殿）にまで登ってきて抗議したという物語を、絶妙なタッチで銅板に描いた彼の作品（アムステルダム国立美術館）がある。絵に描かれた女たちの出自は、ネーデルラント、ヴァーテルラント（オランダ北部）などあらゆる国々におよんでおり、フライパンや回転式焼き串で武装している者もいた。犬に荷車を引いてもらっている身体の不自由な老婆も描かれている。またかピトリウムは実際に写生されたものであり、そこに馬上のマルクス・アウレリウスも描かれている。その絵はすこぶる多彩で、画面構成にもすぐれ、巧みである。さらに多くの秀でた肖像画や諸作品が彼の手で描かれ、日々新たな制作がつけられている。ピーテルの自宅においても、さまざまな画家の手になる出来のよい作品や肖像画を目にすることができる。そのなかには、ファン・アーケンが二、三年前に送つてよした自画像（現在失われた。ヤン・サーンレダムの版画からその図柄を知ることができる）がふくまれている。その自画像は驚くほどすばらしい出来映えで、私が耳にしたところによると、彼に生き写しである。ベルン生まれのヨージェフ・スヴィッツァー（ハインツ、一五六四年、六月二日バーゼルで洗礼を受ける）という、ハンス・ファン・アーケンの弟子と見なせる者もこの場に加えておいたほうがよからう。スヴィッツァーの父は建築家ないしは石工であった。ローマに着いたときのヨージェフは、デッサンは少し身につ

けていたものの、絵具の処理はできなかった。しかし、スウィッツァーは、「緑のアントニス」ことアントニー・サントフォールト（そう呼ばれていたように）の家でハンス・ファン・アーケンに師事し、油彩画法の修得に心血を注いだ。ドイツ人やネーデルラント人以上に彼は絵画に専念し、ヴェネツィアだけでなくローマにあっても、

（fol. 291v）ブリュッフ出身の画家、ピーテル・デ・ヴィッテの生涯³

無にかかわらず多数の人におのれの豊饒なる成功の機会を常に増し、その栄えある名声が津々浦々にまで轟くようになるのは、芸術の恩寵によるのだとわたしは説いた。

ピーテル・デ・ヴィッテ

アドリアン・デ・フリース

才能ある画家でデッサン家でもあったメヘレン出身のピーテル・ステフェンスのようなすぐれた才能に恵まれた芸術家たちや、絵画にたいする愛から絵筆をおりおり握る、有能な画家でもある腕のいいエングレーヴィング師ヒーリス・サドラー（「エヒディウス・サデル」などがプラハに多数滞在していた。ホラント州のデン・ハーグ出身のすぐれた彫刻家アドリアン・デ・フリース（一五四五

一六二六）は、

麗しき街フィレンツェには、彼女が魅惑し、おのれの魅力を増すことになるわれらネーデルラント出身の赫々たる芸術家のひとりにして、両親といっしょにその地に長く滞在する有能な画家ピーテル・デ・ヴィッテがいる。彼というよりも彼らは、フランドルのブリュッフをひきはらってローマへやってきたのである。デ・ヴィッテは、フレスコ画と油彩に優れた画家であり、絵画芸術において彼に大いに役立つ人体モデルを粘土でかたどつたりもした。ローマの教皇庁の広間に騎士ジョルジョ・ヴァザーリのために多くの作品を描いた。フィレンツェ大聖堂のクーポラをはじめとして諸処で作品を手がけている。さらに、フィレンツェ大公からさまざまなタペストリーの図案など種々の注文を請負つたりした。彼はまた、バイエルンのミュンヘンに長期滞在したことがあり、バイエルン公などのために色々重要な作品を手がけている。わたしは、フィレンツェで彼の手になる作品を何点か目にしただけでなく、かの地で面識をもつた。彼の兄弟のなかに公の守衛がいた。たしかコルネリスとかいう名前で、わたしがフィレンツェに逗留していた一五七三

年、彼は風景画を描きはじめた。彼は画家としては遅い出発であったが、風景画においては卓抜な技倆を発揮した。ピーテルの版画のなかには公刊されているものがあり、それを見れば彼の才能と芸術、それにちなんので、純白の「ピエール」と名づけられたのほどを観察することができる。今年一六〇四年、彼はたしか五六歳くらいである。聞くところによると、彼は依然としてバイエルンのミュンヘンで健在である。してみれば、わたしがフィレンツェを非難するのは、筋違いかもしれない。

アントウェルペンの画家、マテウス（マティス）・パウヴ
(fol. 291v21) エルス（パウル）・プリル兄弟の生涯

うつとりさせるほど魅惑的で知らぬ者のなきローマ画家にとつて都合よく建てられたよつな、また芸術作品できらびやかに飾られた街は、多数の芸術家と同様、アントウェルペン出身のマテウスとパウヴェルス・プリルという二人の兄弟をも魅了した。マテウスは、ローマの教皇庁ギャラリーだけでなく広間の装飾も手がけた。マテウスが手がけたフレスコ画のうちで最高級のギャラリーに、ローマで慣習としておこなわれていた行列の描きこまれた繊細な風景が見られる。一五八四年、三四歳にして彼はローマで客死した。パウヴェルス・プリルは凡庸な画家ダミアーン・ヴォルテルマンズといつしよにアントウェルペンで仕事を始めた。最初彼はハープシコ

(fol. 292r)

ードのカバーなどを水彩で描き、糊口を凌いだ。一四歳のときである。彼はアントウェルペンからフレッダに赴き、そこからふたたびアントウェルペンに引き返した。そのあと、外国に足を伸ばすことに同意しなかった親戚たちにも告げずフランスへ旅立った。ときに二〇歳であった。しばしリヨンに滞在。そこを引き払い、以前から兄弟が住んでいたローマへ足を運んだ。若い時分画業の修得にはたいへん手間どつたものの、ローマで彼は風景画において格段に腕をあげた。彼のもっとも重要な作品の一つに、フレスコで描かれた風景画の大作がある。幅六八フィートあり、高さもずいぶんあって、教皇庁の新しい広間をうめている。制作年は、一六〇二年である。その絵には錨をくくりつけられ海中に投げ込まれる聖クレメンスの物語が描かれている。空中に天使が飛翔しているのが見られる。観察していくのが実に楽しい作品だ。教皇の夏の部屋には、なだらかな丘陵地帯の広がるローマ近傍の教皇直轄地に点在する、もつとも豊かな修道院のいくつかを写生した六枚の美しい風景画がある。ついで、枢機卿マッテオ（マッティ）の求めで彼は、部屋全体を風景とグロテスク文様で飾つた。この枢機卿の兄弟ハスドゥルバルマッテオのために、六枚の風景画大作をカンヴァスに油彩で描いた。そこにはこの貴顕の所有する城が六つ描かれており、絵の前に立つと遠景にそれらの城郭が望まれる。これらの絵はすべてたいへん美しく、みな大作である。カンヴァスや銅板に描かれた、そのほ

か彼の手になる数多の小品が、美術愛好家たちの手元にある。ヘインドリック（ヘンドリック）・ファン・オス殿のものには、名状しがたいほど美しい廃墟と点景人物のいる銅板の美しい小品がある。この情景は古代ローマの市場であるカンポ・ヴァッチーノを描いたものである。ほかにも彼の手になる美しい風景版画がある。今年一六〇四年、パウヴェルスは四八歳である。彼にはローマに既婚の弟子が一人いる。彼の名前はバルタザル・ラウヴェルスという、年の頃二八歳くらいのネーデルラント人で、風景画を得意にしていた。また、アントウェルペン出身で二二歳のヴィレム・ファン・ニーウラントもやはり一年間彼の弟子であった。現在、彼はアムステルダムに住んでおり、師匠の様式の肝要な特徴を継承している。

(fol. 292v17) ハールレム出身のすぐれた画家コルネリス・コルネリス・ゾーンの生涯³⁾

ある人の不運が別の人の幸運になるとか、あるいはときとしてだれかの不運がなんらかの幸運を誘うという俗信や言い伝えが流布している。かように天上が、人間の悲惨さに同情したり、それに心を動かされることをしめしている。歴史のある高名な街ハールレムは、驚くほど壮観であり、三一週にわたる（スペイン軍の）包囲のあいだハールレムが、貧弱な城壁にもかかわらず、人びとの士気の高さと勇敢さによって、恐るべき巨大な敵に抵抗

したありさまをだれもが口にした。（スペイン軍から）解放されたのと同様に、スバルネ川に面した広壮で瀟洒な邸宅の管理保存が、ピーテル・スヒルデルの手に委ねられた。このピーテルは、アムステルダム出身のランゲ・ピールの息子であった。こうした環境のなかで、一五六二年ハールレムに誕生したコルネリス・コルネリス・ゾーンの才能を呼びさます刺激的な人物であり最初の師匠となったのがピーテルである。戦争の難を逃れてコルネリスの両親とも、別の場所で暮らしていた。自然に導かれるかたちで彼が家庭で実践したものから判断すると、コルネリスはまだ幼児であった。が絵画芸術に専心するようになったのは一五七二、三年である。というのは彼は芸術のうちで何か一芸に秀でた面をすでにあらわしていたからである。来る日も来る日もナイフや何かで赤煉瓦に像を切りとったり、彫刻した。かくして、若きランゲ・ピールのもとでコルネリスは、われらが芸術をスタートさせたのである。われらが芸術のあらゆる面においてすぐれた画家であり、色彩（絵具を油や卵白等々と混ぜる）等々の混成に熟練していたピールは、二、三年のあいだに絵画技倆において師匠を凌ぐようになる弟子を育てたのである。運命の女神の差配でもあろうが、若くして彼は師匠から姓を受け継ぎコルネリス・スヒルデル（画家コルネリス）と命名され、長くこれを名乗った。芸術のあらゆる面に抜きんでていた彼はこの名前に何ら恥じることはなかった。弱冠一七歳にして一人前の

画家となり、フランスのルーアンに旅立った。しかしペストの危険から、その地にとどまることができず、絵画芸術で有名なアントワープへ足を向けた。その地で、何人かの卓抜の画家たちのもとでなんとか仕事を得ようとした。フランス・ブルピュスの門を叩き、最後にヒリス・コイグネットに受け入れられた。一年足らずこの画家のもとに滞在するあいだに、彼は滑らかで流麗な様式を修得した。彼がコイグネットのものでか、もしくはそこを出たのちにすぐに制作したカンヴァスにはすこぶる生彩に富んだタッチで繊細かつ柔らかくぼかすように女性像が何人か小さく描かれている。その絵に実物から写生したあらゆる種類の花々をいけた花瓶も彼は描いている。しかし、(画家のこだわりから)その絵には緑色がほとんど用いられていない。これらの花の絵は、まことにみごとな出来映えであり、コイグネットが長い間手元において、売却しようとしなかったくらいすばらしく絵画的な様式で描かれている。コルネリスがハールレムにやってきたとき、彼は芸術のさらなる発展に精力的に取り組み、数あるなかでも、ハールレムの射手組合の本部(Oude Doelen)に下士官たちの肖像をモデルにもとづいて制作している。それは、わたしがハールレムにはじめてやってきた一五八三年のことである。わたしはこの地でそのような画家たちを見いだしてひどく驚いた。この絵の構図は無理なく自然で、描かれている者たちは全員、各々の気質や性格が身振りによって表現されている。商業を

生業とする人びとは、たがいに握手し、飲酒好きの人たちはジョッキやグラスを掲げているなど、各々それにふさわしい特徴がわりふられている。とくにこの作品を全体としてすぐれた出来映えである。顔の描写はモデルとური二つで、念入りでかつ筆さばきに淀みがない。衣裳、手など細々したディテールも同様に際だっており、その場に掛かっている他の作品に劣らずこの作品は、その価値にふさわしくそこでかくたる位置を占めているのは疑いない。変化させたり別のやり方を試みたりせずに、こんなにちまですつと堅持してきた、色彩を丹念に描いていくある種特徴的なやり方によって彼は、一貫した絵画様式を獲得した。やはり縦長の大きなカンヴァスに『慈愛』を描いている。慈愛は子供たちといっしょに腰を下ろしている女性だ。その子供の一人が猫を捕まえ、尻尾をもってぶら下げている。子どもが悲鳴をあげているように見えるのは、猫が子どもの大腿部もしくは脚に爪を立てているからだ。子どもは引つ掻かれ痛くて泣いている。その創意は称讃に値し、心そそる、実にすぐれた作品である。しかしコルネリスはある人にうまく言いくるめられ、この絵をフランスにもって行かれてしまった。爾来コルネリスはその絵を目にしていなければかりか、くだんの男の行方も杳として知れず、その代価も受け取れずじまいだ。この一件のあと、彼は、豚の前にバラを撒く、不節制な貪欲やだらしないうちに気前のよい人たちがいる大作を縦長の画面でもう一点制作した。それはやはり

絶妙な創意に溢れ、みごとに描かれている。その間、コルネリスはこれまでに例がないくらい勤勉に、実物からデッサンすることによっておのれの生得の才能を大いに涵養した。その目的を達するために、この土地に数多ある最高のものとも美しく、まるで生きて呼吸するかのような古代の彫像を彼は選択した。そうすることが、少なくとも最高に美しいものを識別する完璧な判断力をそなえているならば、考えられ得るもっともたしかで最良の研究法である。それゆえに、芸術はコルネリスが眠っているあいだに身についたのではなく、彼がそれを獲得したのであり、勤勉な労働によってそれを贖ったのだと宣明できる。別のやり方でそうした完璧さに到達しようと考えるものはだれでも、「勤勉に働く以外には」何の手だてもないことに気づき、狐につままれたように思うだろう。結局のところ、その人は芸術の影を抱きしめていたにすぎないからだ。コルネリスが古代の彫像研究に従事しているあいだに、『大洪水』という縦長の大作をカンヴァスに描いた。その作品はのちにレスター伯の手に渡りイギリスへ運ばれた。それはひときわみことな仕上がりで、考え抜かれた作品である。修業の最盛期に、『青銅の蛇』と同じく縦長のカンヴァス画大作『反逆天使の墜落』を彼は制作した。アムステルダムの子・コフ・ラファルト（ラウヴェルト）が彼の手になるこれら二点の作品を所蔵していた。これら二点に見られるようなヌードのさまざまなポーズを描くにはいかに鋭い観察が必要であっ

(fol. 293r)

たかをくまなく説明することなど、とうていわたしの能力を超えている。そのような作品を公的な場所で見ることができないのは残念なことだ。というのは、この時期、デッサン術、人物像の適切な配置、人体均衡等々に彼は細心の注意をむけていたからである。爾来、彼は大小とり混ぜて相当数の作品を手がけたが、しばしばヌードも手がけた。数ある作品のなかでも、たしかな鑑識眼をそなえた、現在アムステルダムのヘンドリック・ラウヴェルツゾーン・スピーヘル殿のもとにある『最初の世界、ないし黄金時代』がひときわ目をひく。その絵はみごとに仕上げられており、人体表現はすこぶる慎重になされている。実際、手や身体の諸処に見られる細かな凹凸や小皺まで綿密に描きこまれている。この絵はやはり彼の最高級に重要な作品であることは確かである。レイデンのバルトロメウス・フェレリス殿のもとには、彼の手になる大作がある。数体のヌードが見られ、充分な仕上げのなされたその絵には、『大洪水』もしくは『青銅の蛇』が描かれている。ミッデルブルフのメルヒオル・ヴェイントヒス殿のもとには彼の手になる逸品『アダムとエヴァ』がある。くわえて、非常に繊細かつ巧みに描かれたキリスト受難 連作パネルのかなり小さな作品も二点ある。さらに、そこには『ヨルダン川におけるイスラエルの子供たちのお浄め』という手際の鮮やかな作品も蔵されている。かつてコルネリスは『嬰兒虐殺』という大作をものした。その絵はハールレムのプリンセンホフで見

ることができる。その大作の両翼はマルテン・ファン・ヘームスケルクの作で、すばらしい出来映えだ。この絵では、裸体の子殺したちと子供たちを必死で守ろうとする母親たちの熾烈な闘争が見られる。男であれ、女や子供たちの若々しい、弾力のある肉体であれ、肉体が変化に富んだ色彩で描かれることで、多様な年齢層や血の気のない死と化した肉体がそれにふさわしく表現されている。さらに、扉の上方には縦長の大作《アダムとエヴァ》が掛かっている。二人は等身大で、堂々とした体躯で描かれている。同じ部屋には壁を被う大作《神々の饗宴ないしはペレウスとテティスの婚礼》がある。そこに描かれているのは、不和によつて、争いの原因となるリンゴが投げ込まれた場面である。この絵は創意という点でもすこぶる芸術性に溢れた繊細な作品である。これらをはじめとして大作を手がけたあと、コルネリスはそれまでもまして肉体のそれぞれの箇所の彩色に腐心した。この点において、彼の近作と昔の作品を並べてみると一目でわかるほど水際だった差異が観察されるくらい、彼の作品は大いなる変容を遂げた。とくに彼は一六〇二年、すぐれて美しい作品を制作した。その絵は、ひととき魅力的で鮮やかにしかも巧みに描きあげられた《ラザロの復活》といっしょに、ハールレムのゼー・ペールトにあるヤン・マティセンのもとで見ることができる。アムステルダム美術愛好家ヴィレム・ヤコプスゾーン殿のもとにも、コルネリスの手になるかなり小さな作品がある。

(fol. 293v)

アムステルダム
ゼー・ペールト

人物像の大きさはおおむね一フィートであり、そこに描かれているのはやはり《ペレウスとテティスの婚礼》である。正面から描かれた多数の頭部、ヌードやささまざまな事物によつて魅力的に組み立てられ、たいへん賑やかで繊細な仕上げになっている。そのほか彼の手になる多数の作品（一々あげられないくらいだ）が、あちこちの美術愛好家のもとにある。その中には多数の肖像画もふくまれている。コルネリスは自分の才能を肖像画のような特殊な主題に捧げる気がしなかったがゆえに進んでというわけではないが、巧みに描いている。今年一六〇四年、彼は四二歳の働き盛りであり、依然として精力的に作品制作に取り組んでいる。彼の穩やかで愉快的仕事についてさらに筆をすすめるために彼に別れを告げよう。彼にはすぐれた弟子が何人かいた。なかでもとくに、アムステルダムのオルフェウス、最高に秀でたオルガン奏者でヘーリット・ピーテルスゾーンと呼ばれたヤン・ピーテルスゾーンという人物がいる。このヘーリットはアムステルダムのヤーコプ・レナルツゾーンのもとで画業をはじめた。レナルツゾーンの父はザントフォールト出身の船乗りであつた。しかしレナルツゾーンは立派な画家にしてすぐれたガラス絵師であり、驚くほど器用で才能豊かな職人であつた。そのため当時彼に匹敵する人物を見いだすことはまず無理であつた。ヘーリットは師匠のもとで長足の進歩を遂げ、ついには師匠はもはや教えることが何もないから、もっとすぐれて偉大な師匠を探

すようにと彼に告げた。かくして、ヤーコブ・ラウヴァールトの援助かその仲介でコルネリス・スヒルデルの門を叩いた。(わたしの知る限り)ヘーリットこそが彼の最初の弟子であつた。コルネリスのアトリエに来て僅か一、二年で、優れた才能を発揮するようになった。それでもヘーリットはなお三、四年、おのれのためにハールレムにとどまり毎日、実物写生をおこなつた。その結果、彼はヌードにかんして非常に的確な知識を修得した。当時、ネーデルラントの画家たちのなかにあつて彼ほど執拗なまでに努力することは稀であつたし、これまでもほとんど見かけなかつた。このようにして、彼は芸術の腕を上げ、才能を磨き、芸術への愛から、絵筆を、たとえスベイン王の錫とでも交換する気はないとまで公言した。彼は偉大なる領主になるよりも立派な画家になりたかつたのである。その後、彼はアントウェルペンに住み、さらに何年かローマに滞在した。現在、彼はアムステルダムにいてさまざまな大作の制作に余念がない。彼の名前はよく知られるようになり、すぐれた画家であることを証明して見せた。重要な大作を制作する機会を与えられたり、そうした注文を獲得できたのは幸運に恵まれたからだとしても、彼の才能と手が常にそうした制作にふさわしかつたのだが、彼の芸術にたいする適正と筆舌に尽くしがたいほど絵画技法に精通することによって、すばらしい芸術作品が創造できるようになつたことがわかるだろう。というのは、現在では彼は肖像画やとるに足

りない作品の制作に多くの時間を割かなければならなくなっているからだ。そうした巧みにすばらしい仕上げのほどこされた作品は、アムステルダムの市民や美術愛好家のところまで目にすることができるといふ。

補遺

アムステルダムのヘーリット・ピーテルスゾーンの生涯について。今年一六〇四年、ヘーリット・ピーテルスゾーンはアムステルダムの聖セバスティアヌス組合本部のために下士官たちの集団肖像画を描いた。隊長はヤン・ヤンスゾーン・カールである(と思ふ)。その絵は、顔、肖似性、衣裳、絹やその他の細部にかんして、たいへん繊細に描かれた、まことにすばらしい作品である。そうしたすぐれた特質のゆえに、公共性のきわめて高い場所に掛けられるにふさわしい絵である。だが彼は画業を生半可なままにしておくことを望んではない。新たに点火された絵画芸術への激しい情熱によつて、なにか作品を描こうとようやく決心するようになった。なぜなら、こんにちまでおのれの満足いく芸術をまったく制作していなかつたからだ。このことは、安易に満足したり、上達することもなく、後退させる芸術家にたいしては格好の模範となる。若いときには芸術上のすぐれた資質をあらわしながらも、円熟期になつて以降、愚かにも道を外れていたり、誤つた自惚れに墮し、そうして彼らは芸術においてなすべきことを見失ひ、芸術を解する人た

ちを失望させ、落胆させることになるからだ。

本子ル・ピテル・
ラスマン・デルフト
ヤン・コネリス・ヤコ
ブス・コネリス・ゾー
ン・ランゲ・ヤンとい
う名前のデルフト出身の弟子も一人いた。彼はたいへん早熟であつたが、夭折してしまつた。デルフト出身のもう一人、コネリス・ヤコブスも今までのところはみどころのある画家だ。それからハウダ出身のコネリス・エンゲルセンもたいへん優れた画家で、手練れの肖像画家であつた。さらに、長期にわたつてローマをはじめ外国の諸所に滞在し、帰国することが望まれているハールレム出身のヘリット・ノップ。彼が帰国したなら、みんなの期待を裏切らない力量をその仕事によって証明することができさるだろう。同じく、留学によって大いに腕を上げたといえる画家にアルクマール出身のザカリアス等々もいる。

註

(1)ここに訳出したのは、カレル・ファン・マンデル『絵画の書』(Het Schilder boeck, 1604)の一部である。本訳稿は『文化紀要』(第四六号)につづく六回目である。このファン・マンデル・プロジェクトは、国立西洋美術館の幸福輝氏と共同研究のかたちでおこなわれている。

(2)ハンス・ファン・アーケンは、こんにち一般にはハンス・フォン・アーヘン(Hans von Aachen)の名の方で知られている。一五五二年ころケルンに生まれ、一六一五年プラハで没した。彼の作品は、バルトロメウス・スプランゲルの作品と同様、エヒディウス・サデレルの版画を通して広く知られていた。本書が公刊された一六〇四年、ファン・アーケンはまだ存命であつたが、二人が相まみえることはなかった。

(3)この画家は、ふつうはピエトロ・カンティド(Pietro Candido)という名前で通っている。一五四八年ブリュッヘに生まれ、一六二八年ミュンヘンで没した。ファン・マンデルは、ヴィッテの生年を記していないが、一六〇四年で五六歳というのは正確である。一五八七年ミュンヘン到着後、バイエルン公ヴィルヘルム五世、一六一一年から一六年までマクシミリアン一世のために制作する。彼の作品は多く現在でもミュンヘンで見ることができる。レジデンツ(王宮)の装飾、また《エフタの娘》(no. 2065)と《バイエルン公妃マグダレーナの肖像》(no. 2471)がアルテ・ピナコテークで見ることができる。他にも教会に複数の作品がある。

(4)マティス・ブリルは一五五〇年アントウエルペンに生まれ、一五八三年ローマで没した。パウル・ブリルも同じくアントウエルペンで一五五四年生まれ、一六二六年に没している。二人とも彼らの画歴の大半をローマで過ごし、風景画家として北方の画家たちに大きな

影響をあたえた。ファン・マンデルの証言とは異なり、マティスが没したのは一五八三年、三三歳である。一五七五年からパウルは兄のもとにあり、兄から大いなる影響を受けた。

(5) コルネリス・コルネリスゾーン・ファン・ハールレムはコルネリス・デ・スヒルデルとも呼ばれており、ハールレム出身である。彼は一五六二年に生まれ一六三八年ハールレムで没した。彼はファン・マンデル、ホルツイウスといっしょにいわゆる「ハールレム・アカデミー」を開設した。彼の初期作品はスランゲルやホルツイウスによるマニエリスム様式の影響を強く受けていた。ファン・マンデルが列記している《嬰兒虐殺》などコルネリスの作品は多くフランス・ハルス美術館に所蔵されている。《大洪水》はアムステルダム国立美術館にある。

(一九九九年五月二十日脱稿)